



山田智彦

水戸義仲

下

水曾義山

苏工业学院图书馆
藏书章

山田智彦

NHK出版



木曾義仲(下)

一九九九年四月二十五日 第一刷発行

著者 山田 智彦

発行者 安藤 龍男

発行所 日本放送出版協会

〒157-8581

東京都渋谷区宇田川町四一

電話(03)37787111(編集)

(03)37787112(営業)

振替(0011)14917

印刷 大熊整美堂 邦

製本 石毛 製本

落し本・見本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表小してあります。

図(日本義経権センター委託出版物)

本書の無断複製・コピーは、著作権法上の

例外を除き、著作権侵害となります。

山田智彦 (やまだ・ともひこ)

1936年横浜に生まれる。早大卒業後、東京相互銀行(現東京相和銀行)に入行。現在、作家業を主体として活躍、同行顧問も務める。純文学から歴史小説、経済小説に至る幅広いジャンルで健筆を揮っている。主な著書は、『水中庭園』(毎日出版文化賞)、『人間関係』、『蒙古襲来』、『義経の刺客』、『秀吉暗殺』、『天狗藤吉郎』、『城盗り秀吉』、『銀行頭取』、『銀行合併』、『頭取の首』、『銀行消失』、『銀行淘汰』、『銀行屋研次郎事故簿』、『頭取の死角』など多数。

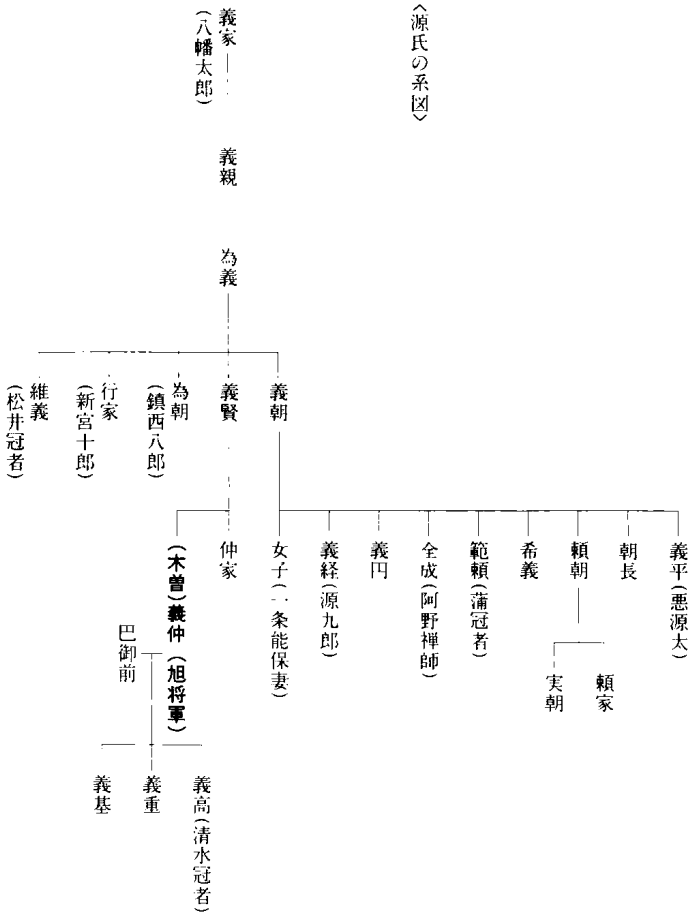
木曾義仲（下）

装幀・装画
題字
前田浩子
原田維夫

目次

復讐	5
元服	56
雌伏 しふく の時	105
母御前の死	151
時の流れ	187
疫病神	219
拳兵	236
白旗・赤旗	260
俱利伽羅 くりか 峠 とうげ へ	285
上洛	316
大天狗	337
疾風のように	363
あとがき	396

〈源氏の系図〉



復讐

悪源太義平は飛驒高山にいた。

父義朝の命令通り、飛驒に下って源氏ゆかりの者たちを頼り、兵を集めた。

——勢のつくこと斜めならず。

と平治物語に書かれている。

この地には小豪族が割拠していた。山、谷、川に囲まれた山間の民である。兵は精悍で強い。

源氏鼯鼠が多いのか、悪源太の豪気な性格が幸いしたのか、これらの豪族たちが、十騎、二十騎と兵を出してくれた。ここで盛り返し、平家を一掃し、源氏の世になれば、さぞかし恩賞も多かろうと考えたのかどうか、兵は続々と集まってくる。たちまち三百騎ほどになった。

五百騎にふくれ上がるまで待ち、先頭に立って京へ攻めのぼる。これが悪源太の心づもりであった。

平治二年一月七日のことである。この年、悪源太は数えて二十歳になる。

義朝が尾張の野間^{たぐわね}で長田忠致に討たれたとの噂がひろがった。この噂はたちまちあちこちへ飛び火した。小豪族たちはもちろん、集まった兵たちの間にも戸惑いと動揺が生じた。無理もない。義朝は源氏の棟梁であり、総大将だ。戦上手の武将として知られていた。その人物が討たれたとあっては、挙兵する意味が無くなる。単なる叛乱軍になってしまう。

九日になって、尾張から来た旅の僧が見聞した真相を語った。奇しくもこの日、義朝の首が左京の獄舎前の棟おうちの木に梟首きようしゆされた。義朝の死が噂ではなく事実であるのが知れると、小豪族たちはいつせいに手を引いた。兵士たちもわれ勝ちに散ってしまった。それどころか、こうなると、悪源太自身の身も危ない。討ち取って手柄にしようと思う人間が次々と出てくる。

悪源太は改めて、人の世の恐ろしさを感じた。昨日までの味方が一夜明けると敵に変わっている。この無情さは淋しき侘わびしさにつながる。もはや悪源太には居場所がない。鎌倉へ帰ればたちまち探索の手が伸びる。いや、すでに伸びているであらう。これも危なかった。京へ向かえばなおさらだ。

——いづれ搦め取られて、生き恥を晒すよりは、おのれの手で腹切つて果てよう。殊勝にもそう考えた。

が、その時、軀うづの奥が疼いた。

——どうせ死ぬなら、一度でもよい、百合香を抱いてからだ。それに清盛か重盛を道連れにしてくれる。

考えが変わった。源太らしい発想である。

そう言えば、百合香にはあれ以来会っていない。彼女との約束通り、義賢よしかたの首を持って帰ってきた。

義賢の最後のひと太刀を股間に受けた。傷が痛み、不覚にも眠り込んだ隙に、百合香は首を盗んで出奔した。彼女が京に向かったことだけはわかった。が、杳ようとして行方が知れない。

もっとも、知らぬのは悪源太一人ということもあり得る。むろん、当人はそんなふうには考えなかった。京に來ると、あちこち探した。地の理に暗く、見当さえつかない。実は、父義朝の郎

党である兵衛介や金王丸が、時折、通っている「蟲の宿」に行きさえすれば百合香はいた。彼女は古巣へ舞い戻ったのだ。

が、源太は何も知らず、今度とてあてはない。とはいえ、あの女性を抱いてからでなければ死ねぬとの思いは依然として強い。今度こそ、会えるかも知れぬとの思いが高まった。

ついでに、清盛か重盛を道連れにしてくれよう。悪源太にとっては、むしろ、こちらの方がいいであつた。

——ともあれ、京へ行って六波羅のあたりへ潜伏しよう。

そう考へて、悪源太は飛驒高山から姿を消した。

一方、先に坂東へ入って、主に相模、武蔵で兵を集めていた兵衛介の身にもほぼ同じことが起つた。義朝が尾張で討たれたのが知れると、たちまち勢いがしぼんだ。悪源太が陥つた状況と似ている。

こうなると、早急に姿を消さざるを得ない。ぐずぐずしていれば命を狙われる。兵衛介も僧体に化けて、京へ向かつた。義朝が残した常盤とこまわと幼き者たち、今若、乙若、牛若の三人の安否が氣遣われたからである。義朝は平治の乱で敗れて東国に落ちる時、金王丸を使いに出して危急を知らせた。

「いったん東国へ落ちるが、安全な場所が見つかりしだい迎えをよこす。それまで何処かの里へ隠れておれ」

との指示を与えた。

兵衛介もそこまでは知っている。常盤の家は六波羅の近くにあつた。残つていては危ない。すでに身を隠したであろうが、確認だけはしておこうと考えた。

しかるのちに、どうするか？ 彼はまだ決めかねていた。

出来るだけ早く、義朝の家人であつた事実を消してしまわねばならない。すべてはそれからである。

常盤の屋敷の近くまで来ると、その方向から急ぎ足でやってくる者がいる。

よく見ると、金王丸だ。

「や？」

「これは」

両者共に驚きの声をあげた。

兵衛介は金王丸を目立たぬ寺の境内へ連れて行つた。人気の無い本堂の裏へ行く。そこで一別以来の様子を聞いた。ほぼ噂通りであつた。

「常盤殿にも急を知らせ、大和の宇陀郡竜門の里に住む伯父を頼って行かれるよう話をしたところでござる」

と教えた。

「すると、そちらの方はひとまず」

「さよう、先々のことまではわかりませぬが、取りあえずは平家の目をくらませましょう。ところで」

と声をひそめる。

「悪源太殿が飛驒より京に向かつたとの噂でござる。しばらく六波羅界限に隠れ住んで、清盛が重盛を道連れになさる由、勇ましいことじゃ」

「さようか、悪源太殿らしいな。これより、そなたはどうする？ まさか、手伝うつもりではあ

るまいな」

とたしかめる。

「とんでもござらぬ。悪源太殿にはついて行けぬ。それがしはこれより仏門に入り、出家した上で諸国を巡って亡き殿の菩提ぼだいを弔とむいとうござる」

と希望を述べた。

「よかろう。なかなか殊勝な考えじゃ」

と兵衛介は誉めた。

「兄者はどうなさる？」

金王丸は不安気な表情で訊く。

「似たようなものよ。菩提を弔わねばならぬお人がずいぶんと増えた。すでに身は僧体になっておる。いままでは仮の姿であったが、これからは心を入れ替えて仏門の修行に励まねばならぬわ」

と応じた。

「それがよろしゅうござる。保元、平治と二度の戦乱を身近な場所で見てるんざりしまいた。もう、殺し合いはたくさんじゃ」

と吐き出すように言う。

「では、それぞれの道を進もう。同じ仏門であれば、また何処ぞで出会うこともある。達者だな」

兵衛介は弟分の肩を軽く叩いた。

「兄者も、息災で」

金王丸は声を詰まらせた。

それからわずか数日後のことである。

旅の僧が勝手知った様子で、松本平の国府裏、中原兼遠かねとよの下屋敷を訪ねてきた。旅の僧は湯茶の接待を受け、当主の中原兼遠が上屋敷から下ってくるのを待った。

ほどなく、兼遠があらわれた。

「これは兵衛介殿、お待ちせしまいた。よくぞ来て下されましたなあ」となつかしそうに言う。

「おそらく、当方にとって、良い知らせでございましょうな」
ついでに言った。

実は、兼遠は斎藤別当実盛からの書状で、すでに平治の乱の結末を知っていた。根井ノ小弥太をはじめ、一部の戦死者を除き、坂東源氏で京へ上った者たちの殆どが、次々と郷里へ帰ってきた。義朝が尾張で討たれたことまで知れ渡っている。

「いかにも」

と兵衛介は答えた。

「すでにあらかた、お耳に入っておられましょう」

とつけ加える。

「なかには噂もありましてな。事実かどうかを、いちいちたしかめたくて、うずうずしております」

「ならば、何なりと訊いて下され。すべて、それがしがお答えしましょう」

「これは有難い。では、遠慮せず、さっそくお願いしますぞ」

と兼遠は始めた。

しばらくの間、二人は問答に熱中した。噂や書状ではなく、兼遠は兵衛介の口から出る言葉を信用している。

「如何でござる？」

と兵衛介は感想を訊いた。

「むごいものでござるな」

兼遠はしばし黙禱する。

「よう話して下された。改めてお礼を申します」と頭を下げた。

「これで駒王丸の身から、あらかた危険は去りましたな」と念を押す。

「まだ、悪源太義平が生きておりますぞ。いま頃はもう京に着いて、六波羅の近くにひそんでいる筈でござる」

と注意を喚起する。

「そうであった。それを忘れてはならぬ」

兼遠はおのれに言いさすように言う。

「実は、その件でちと相談がございましてな」

兵衛介はさり気なく申し出た。

兼遠は大きく頷いた。

「何なりと言うて下され」

と兵衛介を促した。

「悪源太義平は駒王丸の父の義賢殿よしけんの仇でござる」

と兵衛介は改めて言った。

「いかにも、その通りじゃ」

そう応じたものの、兼遠は兵衛介の真意が掴めない。

「たしかに、悪源太は剛の者なれど、勝手知らぬ京に一人で入り込んだとなると、事情は別でござる。坂東でのように、まるでおのれの家庭かなんぞのごとく振舞うわけにはまいりませぬ」

「そうであらうの」

「よって、仇を討つのであれば、いまを逃す手はありません」

はつきり言った。

「うむ」

兼遠は唸った。

はじめて兵衛介の真意が理解出来た。

「すると？」

思わず身を乗り出した。

「本来ならば、駒王丸殿に討たせとうござる。なれど、まだ七歳になったばかり、荷が重すぎます。それに悪源太は魔性の男と言うてもよいほどの偉丈夫にて、もし、駒王丸殿が姿を見せれば、どのような手段に出るのか、予想もつきませぬ」

と兵衛介は述べた。

「下手な手出しは危険きわまりないということじゃな」

兼遠はわかりが早い。

「では、どうなさるおつもりじゃと訊く。」

「剛太殿の手を借りとうござる」

「ほう、剛太殿の」

「さよう、あの者にとっては主人の仇、よもやいやとは言いますまい」

「そうであつた」

兼遠も納得した。

「今度は、大藏館襲撃の夜に係わりのある剛太殿とそれがしの二人のみにて決行しとうござる」と兵衛介は決意を口に出す。

「さようか、これは願ってもないことじゃ。二人で駒王丸殿の仇討ちの代理を務めて下さるわけじゃな」

とたしかめる。

「なれど、何故二人で？」

「それは」

と兵衛介は口ごもつた。

兼遠はもの問いたげな顔付で見ている。

「別に、他意はござらぬ」

と兵衛介は答えた。

「万が一、根井ノ小弥太殿が助太刀をと申された場合、丁重に謝絶して下さい」

と頼んだ。

「なるほど、小弥太殿のことか」

兼遠は納得した。

「道理じゃ。かの人も血の氣の多い男故、おそろく共に京へと言い出し兼ねぬ」

とつけ加える。

「小弥太殿は京から戻られたばかりでござる。平治の乱の負け戦にて、さぞや怒り狂っておられましよう」

「さよう、おっしゃる通りじゃ」

「小弥太殿にはぜひともこの地に残って頂き、われらが留守の間、駒王丸殿を守って貰いたいでござる」

と主張する。

「そうよ、それがよい」

兼遠は賛同した。

「と申しますのも、悪源太義平、もはや手負いの身も同然にて、行く場所もない身、何を考えるやらわからぬところがあります。京にしていると見せかけて、信濃国へ参るやも知れず、駒王丸殿を道連れに思つても不思議はありません」

一氣に言つた。

「なんと?」

兼遠は顔をしかめた。

「さようなことも起るのじやな?」